僕と紗江ちゃんでらぶらぶキャンプ！

まなつか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕と紗江ちゃんでらぶらぶキャンプ！

【Ｎコード】
Ｎ７１７４Ｘ

【作者名】
まなつか

【あらすじ】
祝★アマガミＳＳ二期！　――を記念して書いた「僕と逢との一泊二日」とは別の小説です。紗江ちゃんをヒロインとして迎えたこの作品はやはり前作同様「お泊まり」というところです。さてさて、偉大なる「橘さん」は山でなにをしてくれるのであろうか――？

第1話「始まり」

「ん〜っ、やっぱり空気が違うね」
僕は大きな伸びをしながら隣にいる紗江ちゃんに言う。
「そうですね……あっ、先輩！　小鳥さんたちがたくさん……」
僕は紗江ちゃんの指さした方向をみる。小鳥がたくさん山の方へと向かって行っていた。
「本当だ、たくさんいるね」
「いいなぁ……私も空が自由に飛べたらいいのに……」
「紗江ちゃんなら飛べるさ！」
「えっ……そんな……でも、飛べそうな感じがしますね」
ははははっ、冗談を本気にするなんてかわいいなぁ。

僕と紗江ちゃんは輝日東山にキャンプに来た。あのクリスマスから半年。そう、あれは二週間ほど前のことだった。

「先輩……あの、今度遠足があるんですけど……」
「あ、あぁ、僕も去年行ったな……。輝日南山だっけ」
「は、はい。そうなんですけど……あの、私体力がなくってみんなに迷惑をかけないか心配で……」
「あ、それなら――」
ん、待て。輝日南山は結構緩やかでルートは短いはずだ。これは美也からも聞いているから紗江ちゃんも知っているはず。それなのになんで僕に相談なんて……？
「先輩……？」
いや、これはただ相談しているんじゃない。僕――つまり、教官に特訓をしてくださいと言っているようなものじゃないか！
「紗江ちゃん！」

僕は紗江ちゃんの肩をがしっと掴んだ。
「は、はい！」
「一緒にキャンプに行こう！」
「は、はい……？！」
驚いた表情を見せる。あれ……違ったかな。
「一緒に特訓しよう！」
「えーっと……え？　わ、私と先輩とで泊まりでキャンプするんですか？」
「そうだよ！」
「えぇぇぇーーー！？　と、泊まり……泊まり……泊まり……」
紗江ちゃんは口の中でずっと「泊まり……」とつぶやいている。
「……わ、かりました。お父さんとお母さんに訊いてからにします」
「よし、決まりだ！」
――とその後にいろいろあって今に至る。
キャンプの用具は梅原のお兄さんから借りてきた。

「さぁ、行くぞ紗江ちゃん！」
「はい！　教官！」
僕たちは青空に向かって拳を突き上げた。

第1話「始まり」（後書き）

こんにちは、まなつかです。

また新たに連載小説に手を出してしまいましたが……更新がきつい……。

受験生ですので、おそらく更新は週に一回。水曜日の午前0時になるかと思います。

塾の帰りに執筆をしていますので。

僕はどちらかというと巨乳はではなく、貧乳派です。

最高です。↑冗談です。

いいんですよ、胸なんて。可愛けりゃいいんですよ。

さーえちーん

それでは。

第2話「先輩、トイレ行きたいです」

「紗江ちゃん、見てよ」
「わぁ……すごいです。こんなにも落ち葉が積もってますねー」
　山のふもとに一歩足を踏み入れると落ち葉でいっぱいだった。
普段街の方で暮らしている僕たちにとってそれはすごいことだった。
一歩歩くごとにサクサクという感触がなんともいえない。
「大丈夫？　鞄、重くない？」
「は、はい。大丈夫です」
　紗江ちゃんのリュックサックには二日分の食料が入っている。缶詰をはじめ、米やお菓子なども入っている。ちなみに僕の鞄にはテントや飯ごう炊さんの道具、そのほかいろいろな物が入っている。正直かなりきつい。
「それじゃあ、行こうか」
「はい」
　そしてしばらく歩く。景色はあまり変わらず綺麗な赤や黄色の葉が風によってちらちらと舞っていた。
「先輩……あの……」
「ん？」
　紗江ちゃんが顔を赤らめてもじもじしている。
「その……えっと……」
「どうしたの？」
「と、トイレが……したいです」
「えぇっ！？」
　や、山で！　ト・イ・レ！？
「で、ですから……その……ちょっと失礼します！」
「あぁっ！」
　紗江ちゃんはほいとリュックサックを放り投げると道からはずれ

た方へと行ってしまった。

「なんてことだ……」

聞こえるぞ。

き、こ、え、る……！

「聞かないでくださぁぁあい！！！」

よほど我慢していたようだ。

至福？　の一時を過ごせた。ははっ、いいじゃないか！　ハイキング最高！

僕は木々の隙間から見える蒼い空を仰ぎながら一人、にやついていた。

第2話「先輩、トイレ行きたいです」（後書き）

こんにちは。まなつかです。
なんか最近めっちゃ疲れてますん。
更新速度は相変わらず週一回で行かせていただきます。
それでは。

第3話「紗江ちゃん、やましいことを（ｒｙ」

「さぁ、行こうか」
「はい……」
紗江ちゃんは流石に先ほどのことで頬をさくらんぼのように赤く染めていた。
「ところで先輩」
「ん？」
「目的地はどこなんですか？」
「あぁ、それね。どっか泊まれそうなところがあったらそこでキャンプをする予定」
「だ、大丈夫なんですか？」
「ははは っ！　大丈夫大丈夫！　ほら、僕の友達の梅原」
その梅原という言葉を聞いたとたん彼女はさらに顔を赤くした。
……なにを想像しているのだろうか。
「あいつが昔この山でキャンプをしたことがあるそうだよ」
「だ、誰とですか！？」
「え……いや、梅原のお兄さんとだってさ……」
言ってからしまったと後悔する。
彼女は完全に自分の世界に入っていってしまったからだ。
「やや、そういうやましいことはなくってさ……ふつうｎ」
「なにを言っているんですか！　私は何もやらしいことなんてこれっぽっちも考えていませんよ！」
「ご、ごめんよ……」
「あ、すいません……私の方こそ」
「……」
「……」
しばし気持ちの悪い沈黙の時間が流れる。お互い何か雰囲気を明

るくしようと辺りを見回すが――

「「あ」」

二人の声が重なる。

視線も同じところに向いていた。

第３話「紗江ちゃん、やましいことを（ｒｙ」（後書き）

こんにちは、まなつかです。

今日学校で置き勉チェックがあるのを知っていたにも関わらず、重いので置き勉をしてきてしまいました。最悪です。眠れません。

学校の教科書って正直役にたたな（ｒｙ

うちの県だけかもしれませんね。

まぁでも３０冊近くはちょっと多いですよね。限度っていうものがあります。

……あぁ、心配だ。

小心者なのでそれでは。

第４話「熊だ」（前書き）

更新が数時間遅れました。すいません。

第4話「熊だ」

「熊……だよね」
僕は自分でも驚くくらいのふるえた声で隣でそれ以上に震えている紗江ちんに言う。
「そそそそうですよね」
一瞬紗江ちゃんを確認すると顔が真っ青だった。
「どどど、どうしよう！」
やっぱりこの季節、熊が多く出没するよな。どうしよう、やばい。やばすぎる。
「死んだ振りですよ！」
「そうだ！　それだ！」
僕はキャンプ用のナイフを取り出す。そして思い切り腹に刺そうとして……。
あれ。
「先輩！　死んじゃいやです！」
「ううわわ」
どうしよう、気が動転して自分でも訳の分からないことを！
落ち着け……。
梅原はなんて言っていたか……思い出せ。
『あ、もし熊が出たら何が何でも彼女を守ってやれよ。命に代えてでも』
わかった。具体性は無いが今の僕には十分だ。

●熊の餌食になる
↓●おとりになる

●熊より先に紗江ちゃんを襲う

「くーまさーんこーちらー！」

そう叫んで紗江ちゃんを突き飛ばし、走り出す。紗江ちゃんは驚いて動けないはずだ。

「こーっちにおーいで！」

挑発するように服を脱ぐ。すぐに反応してこっちに走ってきた。

……速いぞ。

「こーっちだよーん」

山を縦横無尽に駆け巡る……予定だったが――

「伏せろ！」

誰かの叫び声がして銃声が響きわたる。僕はとっさに転ぶように伏せた。

訪れる静寂。鳥さえもすべて時間が止まったように静かになった。

「大丈夫か！？」

第5話「危機一髪」

「大丈夫か！？」
それは男の声だった。僕はかなりの数の衣類を脱いでいたので体中擦り傷だらけでひりひり痛かった。
「せーんぱ～い！」
紗江ちゃんの震えた声が聞こえる。そして枯れ葉をかさかさと踏む音がして
「先輩！」「た、橘！」
二人の声が重なった。
僕はむくりと顔だけ起こす。
「梅原のお兄さん！」
「久しぶりだな。はは、まさか熊におっかけられているとはな。……この子はカノジョかい？」
「ええ、そうです」
「守ってやろうとしてたんだな」
「はい！」
「先輩！」
突然柔らかい感じと共に身体が軽くなる。紗江ちゃんが起こしてくれたのだ。
「よかったです、無事で……」
「ありがとう」
僕らはそっと口づけをした。
「お、お、俺は！　何もみてないからな！　そ、そんじゃこの熊はもらってくから！　じゃ、じゃあなぁ」
「はい！　ありがとうございました！」
「おぅ、またな！」
彼は銃を担ぐと帰って行った。猟でもしているのだろうか。

「先輩、私のためにありがとうございました」
「ははははっ、ちょっとかっこわるかったけどね」
「そんなことないです！」
「ありがと、紗江」
ぎゅっと抱きしめる。紗江の温もりが――

僕は服を着ていないことに気づき、急いで集めてきた。

「さぁ！　頂上目指してひと頑張りだ！　行くぞ！」
「はい！」
今度はしっかりと手を握ってはぐれないようにした。
顔を見合わせてにっこりと彼女は笑った。

第5話「危機一髪」（後書き）

感想などありましたらどうぞお気軽に。

第6話「山頂にて」

山の空気がやっぱり変わってる。
そう思っているのは僕だけではない、隣にいる大切な人もおもっていると思うと嬉しさが増した。
「紗江ちゃ――」
「おなか減っちゃいましたね」
「へっ！？」
心は通じなかったようだ。
「あ、まだ減っていませんか？　でもでももうお昼ですし……」
時計を見ると午後2時だった。なんやかんやでこんなに時が経っていたとは。
「そうだね、お昼にしようか」
「はい！」
適当な場所を探すとすぐ近くに岩があった。二人くらい座れそうな岩だ。
「ここで食べよう」
座ってみると目の前に広がった景色に思わず息を呑んでしまった。

いつもの風景。同じ場所。あのファミレス、海、学校……
何もかもが違って見える。
輝いて見える！

「わぁ……素敵な場所ですね」
やっとわかってくれた！
「鳥さんになった気分です」
「そうだよね。これだけ高いと輝日東が全部見渡せちゃうよ」

吹いてくる風が心地良い。
耳を澄ますと後方から美しい鳥の鳴き声。
落ち葉がひらひらと舞っている。

「せーんぱい、食べましょう？」
隣には柔らかな笑顔を浮かべている一人の少女。
「そうだね、食べようか」
僕らは紗江ちゃんが作ってくれたサンドイッチを食べる。いろいろあったために潰れてしまっていたがそこに込められた愛情は変わらない。
「私が作ったんです」
「うん！　おいしいよ！」
僕は急にお腹が減ってきて無我夢中にそれを胃袋の中へと放り込む。

「先輩、マヨネーズ、ついてますよ」
「えっ！？　本当！？　どこどこ？！」
あわてて顔を拭おうとしたその時、紗江ちゃんがぐっと顔を近づけ――

「ここでしたよ」
「え……」

な、なんなんだあの「ちろっ」っていう擬音が最もよく似合うようなあの感触は！　そして頬に感じたあのなんとも言えないざらっとした感触、温かさ！

「さ、紗江ちゃん！？」
「えへへ……一度やってみたかったんです。本当はついていませんでした」

可愛らしくほほえむ。
心の中がほわっと温かい感じに包まれた。
僕は、今！　幸せだ！
ここから輝日東に向かって思い切り叫びたいような気分だった。

第6話「山頂にて」（後書き）

こんにちは、まなつかです。

最近本当に寒くなりました。
テストも近く、受験も近くなってきました。
全国の受験生さん、がんばりましょう。
それでは。

第7話「テント張るのを手伝ってくれ！」

「そろそろテント張る？」
近くを少し散策したり紅葉を楽しんだりしていると日がだんだんと傾き始めた。
「はい、そうしましょう」
「じゃあ、準備しようか」
この山にはキャンプ場がある。そこで自由にテントを張ったり、水道が使えたりするのだ。利用料はまぁ、払えないほどではない。
僕は大きなリュックサックからテントの部品を取り出した。軽量型なのでしっかりとした作りではない。雨風をしのげる程度である。
「こんなの簡単だな」
余裕余裕とぶっこいて作業に取りかかった。

「……先輩、もう暗くなってきましたよ」
「……」
どうやら説明書を家に忘れてきてしまったようだ。かなりきつい。
「手伝いましょうか？」
「うん……」
紗江ちゃんがぱさぱさとテントを開こうとする。
「うん……」
開かないね。
「どうしよう……なんという偶然なことに周りに人がいないし――」
そういいつつぐるぐる見渡すとどっかでみたような人影が一人。
……もしかして。

「何よ」
声をかけるとやっぱり彼女だった。
「絢辻さん、頼みたいことがあるんだ」
「ん、何？」
彼女はテントを手際よく張っていた。普段見られない私服姿を見るとカノジョがいてもなんだか……その……うん。
「なんなの？　というかなんであなたがこんなところにいるのよ？　ストーカー？」
「い……いやまさか……。それでその、テントを張るのを手伝ってほしいんだけど」
「セクハラお断り」
「え？」
何もそんなことを……

……あ。
「ご、ごめんなさい」
彼女もそれに気づいたようで真っ赤な顔であわてて訂正する。
「か、勘違いしてて」
「ははは、いいよ、別に張ってくれるならそt」
「先輩！　早くしてください」
うは、本来の目的から外れてしまうところだった。
「はいはい、可愛いカノジョさんにいいとこ見せれないじゃない。私が指示出すからあなたがやって」
「ありがとう、絢辻さん」
絢辻さんを連れて僕は紗江ちゃんの元へと戻った。

第7話「テント張るのを手伝ってくれ！」（後書き）

こんにちは、まなつかです。

いや、まさか前作のアマガミ二時創作（あの七咲のやつ）で絢辻さんの漢字が間違っているとは思いませんでしたよ。

ははははっ。

受験生でかなり忙しくなってきました。

クリスマス恒例の小説も連載の用意ができてきました。

１２月になってから連載開始予定です。

それでは。

第8話「橘の熱く、譲れない主張」

「……これでいいわね」
「やった！　できたよ！　紗江ちゃん」
飛び上がるような気持ちだ。
「絢辻先輩、ありがとうございました」
「いえいえ、いいのよ。礼には及ばないわ。さ、もう暗くなったし寝るなりバーベキューでもするなりしたら？」
そう言って絢辻さんは自分のテントのある方へと向かっていった。
「じゃあ、僕らはご飯にするか」
「そうですね」
「食材がある……んだよ……ね」
……ね。
「ね？」
「あ、あはははは！　どうしてだろう。ないな」
やばい。冷や汗がこめかみの辺りに浮かぶ。
このままだと絢辻さんにお世話になることになりそうだ。それだけは避けたい。どんなことを言われるものか……。考えただけで慄然としてしまう。
「……そうだ、アレだ。紗江ちゃんの鞄の中じゃないか！」
「えっ、あ！　そうですね」
彼女はリュックサックをごそごそと動かすと中を調べた。
「ありました！　……カップめんです」
「はははははっ！　よかったよかった」
「……なんでカップめんなんですか？」
「好きだからだよ」
「……そうですか」

彼女は少し残念そうな顔をした。しまった。いろいろ期待させてしまっていたのかもしれない。

……語るか。

「紗江ちゃん！　カップめんを甘く見たらだめだ。そもそもカップめんはインスタントラーメンをどんぶりなしで手軽に食べられるようにと開発されたものなんだ！　中を見ると面がカップのそこから浮いている！　そこに汗と血と涙の苦労が染み込んでいるんだ！」

紗江ちゃんはぽかんと口をあけて一瞬時が止まったように固まって動かなかったが

「ぷっ……くすくす……」

とうとう失笑してしまった。

「あはは……面白かったかな」

「は、い、え……真面目な顔で語っている先輩を見たら誰でも笑いますよ」

「あはははは、真面目な顔だったかぁ」

「はい、いつもへらへらしてるのにこういう時と……そのえっちなことを考えているときは」

「あはははは……」

参ったな。

そんなこんなで結局お湯を沸かしてカップめんを二人ですすったのだった。

第9話「火柱」

「あー、おなかいっぱいだー」
「私、もう食べれないですよ」
1．5倍のスーパーカップのおかげで僕らのお腹は満たされた。食事中、綾辻さんのテントの方から火が上がったように見えたが見て見ぬ振りをした。きっと彼女は無事……と思う。いい人だった。

「先輩、ちょっとそっちへ行きませんか？」
紗江ちゃんは街が見える方と反対側の方を指さしていった。時刻は午後8時。もうすっかり日が暮れてしまっている。懐中電灯を片手に歩き出した。
夜の森は少々気味が悪い。
突然頭上で鳥が飛ぶと心臓が止まりそうになる。だけどそのたびに紗江ちゃんがしがみついてきて――その、アレが柔らかくってそっちの方に気が行ってしまって……その、男ならしょうがないだろ？　まぁ、注意がそれるのである。
そして紗江ちゃんがここでいいですと言って止まるまで奥へと進んだ。
「わぁ……」
彼女は空を仰いだ。僕も同じように見上げる。
「おぉ……」
星が見えた。
ふと自室の押入れのプラネタリウムを思い出す。彼女はそれの存在を知っていた。
「綺麗ですね……」
ん、なんかどっかで聞いたことあるような台詞だ。

●　君の方が綺麗だよ、紗江……
●　そうだね。
●　綺麗だね。

迷いなく一番目を選んだ。
「君の方が綺麗だよ……紗江」
「えっ」
ふっと彼女が僕の方に振り返る。星空の明かりに照らされて表情がうっすらと読める。
「先輩……そんな」
「紗江ちゃん……」
僕は彼女の身体をぎゅっと抱き寄せる。えっ……という小さな戸惑いの声が耳元でくすぐったい。
そして自分でも訳がわからないまま彼女の唇を塞いだ。

第9話「火柱」（後書き）

不吉な予感しかしないタイトルですね。

感想・評価をいただけると嬉しいです。

それでは、また来週。

第１０話「帰ってきた！　絢辻さん」

テントに戻ってきた僕らに待ちかまえていたのは絢辻さんだった。
全身黒こげである。
「あ、あの！　……橘君……」
しょんぼりしたような声で僕に話しかけてきた。
「その……テント、燃えちゃった。私の」
「あ……」
何もいえなかった。

「絢辻先輩が無事で良かったですよ」
「えっ……？」
僕も思わず振り返った。
紗江ちゃんだった。
「絢辻先輩の命が無事で何よりです」
なんだかよくわからない不思議な感覚に包まれた。
「ありがとう……中多さん」
紗江ちゃんが僕の目を見つめる。――泊めてやれってことか。
「わかったよ、絢辻さん、今日は僕らのテントで泊まりなよ。寝袋も僕のを貸してあげる」
「ありがとう！　橘君！」
「優しいですね、先輩」
さっきそういう目で訴えてきたくせに！　――とこつんと紗江ちゃんの頭を指で弾いた。笑いながら頭を庇っていた紗江ちゃんはどこか小動物に似ていた。
内気だけど優しい子だな……。

そして狭いテントに三人並んで寝転がった。

「ふぅ……」
もう秋だけに夜は肌寒い。寝袋はああいってしまった上に僕も男だ。絢辻さんが気持ちよさそうに隣で静かに寝息を立てている。
「橘先輩、起きてますか？」
耳元で紗江ちゃんの小鳥のような小さな声がさえずる。
「どうしたの？」
真っ暗闇の中、紗江ちゃんと向き合うとなんだか緊張する。
「あの……寒いですよね」
「……本音を言うとね」
「私のに入ってください」
「えっ……いいの？」
すぐさま脳裏に何かのお宝本の展開が反芻される。……いかんいかん。
「じゃあ……入るね」
「はい……いいですよ」
ごそごそと紗江ちゃんがスペースを空けた。そこに僕は冷え切った身体を入れる。温もりがあるそこはすごく気持ちが良かった。
「あ……」
入るときに紗江ちゃんの身体に触れてしまった。
「ご、ごめん」
「い、え、いいんです」
「うん……」
しばし僕らは無言のまま、かつ緊張で眠れない状態でいた。
沈黙を破ったのは紗江ちゃんの方だった。
「先輩……その、キス、してください」

第１０話「帰ってきた！　絢辻さん」（後書き）

なんやかんやで絢辻さん出番多いですよね。
あのキャラが結構好きです。

第11話「KISS IN THE TENT」

「んっ……」
テントの中の空気は幾分か暖かかったが、やっぱり冷たい。だけど紗江ちゃんの唇はとても柔らかく、そして温かい。
腕を彼女の背中に回す。
「純一先輩……」
「紗江ちゃん」
今度は思い切ってお宝本でしか知らないディープキスに挑戦してみる。
「んっ？」
一瞬戸惑いの声を漏らしたが、受け入れてくれた。彼女のざらりした感触が僕に伝わってくる。

「……先輩の口、醤油味でした」
「えぇっ！？」
しまった、歯を磨いていなかった！
「そういうとこ、好きです」
「え、あ、うん……」
なんかほめられているのかどうかわからないけど……。
「あの……もっとしてくれませんか？」
彼女が僕から目をそらして恥ずかしそうに言う。
「わかったよ」
再びその小さな身体を抱き寄せて――
「あっ……」
彼女が小さな声を上げる度に温かな吐息が僕にかかる。その吐息さえいとおしく感じられた。
「先輩、あっ……」

星明かりがうっすらと彼女の姿を浮き出させていた。

第12話「下山」

「昨日はあんあんあんあんうるさかったわね」
「しっ！　聞こえちゃうよ！　絢辻さん！」
綾辻さんがテントを僕と一緒に畳みながらそういう。もう空は明るく、鳥の声がちらほらと聞こえてくる頃だった。当の本人、紗江ちゃんは川の近くで朝食を作ってもらっている。
「にしても……あなたたち、私がいるのにそういうことする？」
「ご、ごめん……つい」
っていうか、一緒に入れてくれって言ったのは絢辻さんのほうなのに。
「……ぁ、これを先生に言ったらいったいどういう反応が」
「ひ、酷いよ！」
「うふふっ、冗談よジョーダン。泊めてくれてありがとね」
「うん……」
なんだか絢辻さんには逆らってはいけない。

「せんぱぁーい！　ごはん、できましたぁー！」
ちょうど畳み終わる頃、川の方から紗江ちゃんの声が聞こえた。
「今行くよ！」
「はい！」

「可愛い彼女さんじゃない。……羨ましいわ」
「絢辻さん彼氏とかいないの？」
「いるわけないでしょ？」
「はは……」
フクザツな事情があるようだ。詮索するのはやめておこう。

そして紗江ちゃんと絢辻さんと朝ご飯を食べた。パンだった。とても美味しく感じられた。
「絢辻さん、もうそろそろ僕らは下山するけど」
もうそろそろ下山しないと帰る頃には真っ暗になってしまう。
「私は、ここに残るわ。……ありがとね、橘君、中多さん。楽しかったわ」
「うん……」「はい……」
なんだか死ぬ前の人みたいなことを言っているが……。
「絢辻さん、明日学校だよ？」
「いいの。もう。退学したから」
「えっ！？」
「……」
僕と紗江ちゃんは顔を見合わせた。お互い訳が分からないという顔をしている。
「……ぷっ……冗談よ冗談！」
「え……また……」
すっかりはめられている。
「あなたたち二人の邪魔しちゃ悪いかなって。じゃ、私はもう少しこの秋の森を楽しんでから帰るわね。じゃ、ごちそうさま」
彼女はお礼を行ってから立ち上がり、振り返らずに赤く染まった森へ消えた。

”””””

「あっ！　先輩！」
「ん、どうしたの？」
「出口です！」
「あぁ……もうこんなところかぁ」
僕ら二人はもう森のふもとまで来てしまった。長いようで短かったなぁ、この一泊二日は。

紗江ちゃんが先を行く。とてとてと頼りなく、可愛らしい音を立てながら。僕もそれを追いかける。

そしてついに森を抜けた。

「先輩、見てください」

「ん？」

紗江ちゃんが指さす方向に振り返る。

夕焼けに染まった紅葉の森が、深く、輝いていた。

Ｆｉｎ

第12話「下山」（後書き）

こんにちは、まなつかです。

長いこと連載していた小説もついに完結を迎えることができました。若干季節とはずれていましたが、お楽しみいただけたでしょうか？

これからよりよい作品づくりの為にご意見・ご感想をいただけると幸いです。

純一「次回予告！」
みゃー「にぃに！　ついにアマガミＳＳ＋が放送だよ！」
純一「おぉ！　ついにか！　このときを待っていた！」
みゃー「ＴＢＳでは明日から放送だってさ」
純一「絢辻さんとあんなことやこんなことが……」
みゃー「ちょっとにぃに！　まーたえっちなこと考えてるでしょ」
純一「いぃっ！？　そんなことあるわけないじゃないか。これからの橘純一はもっと紳士に生きたいと思っております」
みゃー「信用できないね」
純一「まなつかの小説はこれで終わりですが、アニメを見て、一緒に楽しみましょうっ！」

次回　～～～～（不明？）
絢辻さんと僕のその後――

この小説は、エンターブレイン「アマガミ」の二次創作です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7174x/

僕と紗江ちゃんでらぶらぶキャンプ！

2012年1月4日08時46分発行